
History world

羽山ヒカル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

H i s t o r y w o r l d

【Nコード】

N 5 2 4 7 X

【作者名】

羽山ヒカル

【あらすじ】

現代の高校生二人が幕末の動乱期へタイムトリップ。そこで繰り広げられた決して忘れられない大冒険。

第1話 タイムスリップ（前書き）

幕末の動乱期には、もしもこうなっていたらという出来事が沢山あります。

あくまでもフィクションとなりますが

「もしも」という観点でありながら

楽しんで読んでいただけたら幸いです。

第1話 タイムスリップ

今年の夏も異常な暑さが続いていた

そんな猛暑にも負けず

必死に鳴いて生きている蝉たちを毎日見かけた

私は図書館で自由研究のために本を読んでいた

宇宙についての研究をするために本棚を眺めていた

そんな中になぜか

幕末偉人伝という本が混じっていた

何気なく手にとり

何気なくページを開いた

坂本龍馬

桂小五郎

近藤勇

土方歳三

沖田総司

…

女の私でも

少しは知識があつた

「幕末の時代でも月は今と変わらず綺麗だったのかな…」

そんなことを思いながら本を棚に戻して図書館の屋上へ上った

そこには幼なじみの陽太郎が立っていた

「明日香ってさ、歴史とか好きなの？」

「わっつ！っ…もういきなり現れないですよ。心臓止まりかけたじゃない」

「俺は別に妖怪じゃねんだから…いきなり現れてもお前を喰ったりしねえよ」

そんなことをいう陽太郎は手にレプリカの刀を持っていた

「なんで刀なんか持つてるのよ…銃刀法違反でつかまるよ」

「レプリカだよ。一階の展示場に飾ってあったからちょっと見せてもらってるだけさ。菊一文字っていう刀らしいぜ」

飾ってあったレプリカの刀を勝手に持ってきて、嬉しそうに見ている陽太郎

彼もまた歴史が好きなのだ

展示物を勝手に持ち出すのはもちろん

違反なんだけど…

そのとき陽太郎が刀の柄に手をかけた

「あ！やめなよ陽太郎！」

「大丈夫大丈夫！レプリカだよレプリカ！」

陽太郎がそつと鞘から刀を出し始めた

そのとき

凄まじくまばゆい光が放たれた

まぶたを開いたとき

陽太郎の姿は消えていた

「陽太郎？」

私は不思議になって刀を手に取り、辺りを見渡した

綺麗に並んだ高層ビルが延々と見える

そして、刀の柄に手をかけた

「あの光…一体何？」

陽太郎と同じように鞘から刀を抜いた瞬間

さっきのまばゆい光が私を襲った

そして意識が飛んだ

第1話 タイムスリップ（後書き）

次回もよろしくお願いします。

第2話 迷走

目が覚めたとき

私は布団の上にいた

「なんだ…夢か…」

しかし周りを見渡すとやけに古ぼけた部屋にいることがわかった

(…?ここはどこ?)

「おやまあ、気付いたみたいだね。良かった良かった。」

奥から着物を来て綺麗な化粧をした女の人が出てきた

「あの…ここは？」

「あんなんにも覚えてないのかい？うちの前で倒れてたんだよ。
見慣れない変な服装して…うちで働くためにはそんな格好許さない
よ」

働く？

変な服装？

普通のセーラー服の何が変な服装なの？

何を言ってるんだろう

今時着物来て化粧してるこの人のほうがよっぽど変なのに

...

私は嫌な予感がして外へ飛び出した

そこには見慣れた高い高層ビルはなく

時代劇で見た建物が並んでいた

「ウソ……」

それ以外言葉が出なかった

目を閉じて
必死に記憶をたどる

図書館の屋上で陽太郎の持ってきたレプリカの刀を見ていたら

まばゆい光に襲われて…

ん？

陽太郎…

「陽太郎！」

彼の姿は近くにはなかった

もしも彼も私と同じようにここに来てるならば彼はどこに？

信じられないけど

ここはついさっきまでいた現代日本でない

少なくとも…

タイムスリップって言う洋画は観たことあるけど

これは現実みたいだ

何回 頬をひっぱたいても痛みしか感じない

怖くなって

私は無我夢中に走り出した

第3話 出会い（前書き）

ご無沙汰しています。

間があいてしまいましたが、続きをどうぞ

第3話 出会い

私は走って走って走った…

何も考えられなくなるまで、走って走って

走った

息が苦しくて思わず止まってしまうまで走り続けた

呼吸を乱しながら

辺りを見渡すと

着物を着た人々が不思議そうな顔をして私を見ている

中には刀を腰にぶら下げた男の人もいた

（銃刀法違反だよ…）

あれ？今のセリフつい何分か前に使わなかったっけ…

仕方なく私は来た道を戻り出した

さっき目覚めた家にとりあえずお邪魔して、頭を整理しようと思った

下を向きながら歩いていると

ドン！

と何かにぶつかった

「痛えな！どこ見て歩いてんだ！」

しまった！下を向きながら歩いていたので前にいた数人の男に気づかないでその中の一人の男にぶつかってしまった

「すいません！考え事をしていたので不注意でした！ホントにすいません！」

頭を何度も下げたのにその男はしつこかった

仲間の一人が声を強めて怒鳴ってきた

「おい！コイツ腕が折れてしまったじゃねえか！どう始末つけてくれるんだよ！？ああ！？」

典型的なチンピラの絡み方だった

今時ドラマでしか見ないよこんな因縁のつけ方…

私は頭に来て

「こんなんで腕が折れるなんてどれだけひ弱な身体してんのよ！因縁つけてこないでよ！」

それを聞いた男たちはいつせいに刀を抜き私に刃を向けた

「女…いい度胸してんじゃねーか…俺たちを怒らせてどうなっても知らねえからな」

俺たちが刀を振り上げたそのとき…

背の高い少し痩せた男の人が私の前にスッと現れた

浅黄色に白のダンガラ模様の羽織を着た若い人だった

「女性相手に大の男が五人がかりで何を騒いでるんですか？」

髪を後ろで結んでいて刀を下げた若い男の人…

（この羽織…時代劇で見たような…）

「相手なら私がします。命を捨てる覚悟があるなら、いつでもどうぞ」

涼しい声と余裕たっぷりな雰囲気です。その人は刀の柄に手をかけた

第3話 出会い（後書き）

次回もお楽しみに

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5247x/>

History world

2011年11月25日22時58分発行